

総会・講演大会報告

通常総会・講演大会記事

去る4月4日第63回通常総会、名誉会員推挙式、表彰式、特別講演会が開催された。以下にその詳細について報告する。

第63回通常総会 第63回通常総会は4月4日午後1時より東京大学工学部2号館大講義室で開催された。田畑専務理事司会のもと冒頭に小林会長の挨拶が行われた。

昭和52年度のわが国の経済は、世界の中だるみ状態を反映して低迷を続け、鉄工業生産も一進一退で推移し、在庫は漸増、市況は漸減傾向になっておりますが、最近の円相場の急騰により日本経済をめぐる内外の環境は更に厳しい局面を迎えました。

鉄鋼業も4期連続減産という異例の事態を招いておりますが、鉄鋼技術については本年も超大型高炉の建設、底吹き転炉の稼動、連続鑄造の普及、省資源、省エネルギー化の推進、公害防止技術の開発、コンピューター管理の徹底など活発な活動が続けられました。特にコンピューターは鉄鋼のあらゆる分野で活用されており、鉄鋼業を支える基盤となつて、生産性、品質の向上、省力化、環境改善などに寄与しております。

このように鉄鋼技術は、現在では世界の高水準に達し、先進国から後進国までわが国に対し広く技術協力が要請されるに至り、技術輸出が急増しております。ちなみに技術輸出成約件数は米国、西独、英国をはじめ31カ国、78件に達し、その内容は高炉から圧延までの総合計画操業診断指導に関するものが多いことが注目されます。

今後も国際競争力の強化に資するための独自の技術開発を一層推進させるため、基礎研究、応用研究の充実による技術基盤の培養と、これに基づく独創的、先導的な技術開発の充実に一層の努力を傾注することが要請されます。

日本鉄鋼協会はこの様な認識の上に立つて共同研究会、鉄鋼基礎研究会、特定基礎研究会が活発な研究活動を展開しており、産学一体となつた共同研究体制のもとに鉄鋼技術の推進に積極的な貢献をしております。また情報過多の現在、整理された情報の供給と高い水準の情報収集を図るため本年度より新規事業として「鉄鋼技術情報センター」をスタートさせることといたしました。何卒ご承認下さるようお願いいたします。

鉄鋼業界には省資源、省エネルギー、環境汚染、産業廃棄物処理など重要な諸対策の研究課題が山積しております。

ここに会員各位の一層のご研鑽を願うものであります。

この通常総会のあとドイツ鉄鋼業界にあつて、経営面での豊富な経験と実績をもち、また製鉄技術推進の実践者であるドイツ鉄鋼協会々長・クロツパッハ博士を本会名誉会員にご推挙申し上げることになっております。

ここに博士のご功績に深い敬意を表しますとともに、

今後も日独両鉄鋼協会の友好協同活動の推進にご尽力下さることを期待いたします。

またクロツパッハ博士及びドイツ鉄鋼協会専務理事・ケーゲル氏のご参加を得て去る3月26日かねてから懸案であつた第1回湯川コロキーを開催し、成功裡に終了することができました。ここに両氏に謝意を表したいと思ひます。

名誉会員推挙式に続いて渡辺義介賞、西山賞をはじめ日本鉄鋼協会各賞の表彰式が行われます。これら賞をお受けになる方々のご業績に敬意を表するとともに、心から受賞をお喜び申しあげます。そして今後一層のご研鑽を願うものであります。

以上、挨拶の後、小林会長が議長となり議事に入つた。付議された案件は次の通りである。

1. 昭和52年度事業報告、収支決算ならびに財産目録の件

2. 昭和53年度事業計画ならびに収支決算の件

3. 理事、監事ならびに評議員選挙の件

議事、進行上、初めに議事第3号理事、監事、評議員の選挙が行われた。選挙管理委員に内山郁君、木原諄二君を選び別室において開票に入つた。続いて議案第1号ならびに第2号が関連しているので一括議案として事業と会計に分けられた。

昭和52年度事業ならびに昭和53年度事業計画については河西理事より次のような報告がなされた。

昨年度のわが国鉄鋼業は、経済界全般の低迷と米欧における輸入抑制措置等の影響から沈たいのうちに経過いたしました。日本鉄鋼協会は研究開発や技術開発の一層の促進を図るために基礎研究部門の共同研究体制の充実、鉄鋼工学セミナーの実施、鉄鋼技術情報体制の整備など数々の計画を立て産学協同の実を挙げております。

ここに昭和52年度事業を報告し併せて昭和53年度事業計画をご説明申し上げます。

まず鉄鋼協会の主要な事業であります講演大会の講演発表数は春秋合せて920件に及び前年に比べ113件も急増いたしましたし、和文会誌「鉄と鋼」の論文投稿数もここ数年20%以上の増加を記録するなど順調に推移しております。また欧文会誌 Transactions of Iron and Steel Institute of Japan は月刊誌に移行後年を経過し海外からも国際的学術誌として一層高い評価を受け論文投稿数も増加の傾向にあります。

また15年振りに改編されます「鉄鋼便覧」は、実際の作業または研究に役立つ代表的なデータを広く集録した実務的な便覧とすることを目指し7巻8分冊として53年度末から順次出版することになっております。

企業の技術研究交流の場である共同研究会は、コース分科会の部会昇格に伴い1部会増えて、現在18部会23分科会の機構により、鉄鋼製造技術全般に関し現場的立場から調査研究情報の交流を行なつております。現在

重要視されている公害、環境保全、省力化、合理化、省エネルギー化などについても各部会各分科会の立場から検討され、数多くの成果が報告されております。

基礎研究につきましては、日本金属学会、日本学術振興会と本会との三者による鉄鋼基礎共同研究会も着実な歩みを示し、52年度には新たに高温変形部会と高炉内反応部会の2部会が発足し既存3部会とともに活発な研究活動が行なわれました。

また鉄鋼関連業界や本会共同研究会が解決を要望する「長期的基礎的研究」を本会独自の重要基礎研究として推進するため52年度に初めて特定基礎研究会を発足させ、「原料炭の基礎物性とコークス特性に関する研究」及び「スラグの有効利用に関する基礎研究」のテーマを選定して学問的に掘り下げた地道な研究を開始しております。

次に標準化委員会は鉄鋼に関するJISの見直しや原案の作成ならびに鋼材に関する各種データの収集を行なうほか、固体規格の審議を進め、52年度には初めて18件の鉄鋼協会規格を制定いたしました。またISO国際規格案の審議、国際共同実験の実施、ISO国際会議への代表者の派遣など国際標準化活動も活発に行なわれました。

一方、鉄鋼標準試料は52年度に2種の新製品を加えて化学分析用、機器分析用等合わせて344種という世界に誇る種類の標準試料を製造分譲して鉄鋼分析技術の向上に役立てております。

次に鉄鋼技術情報活動といたしましては、昭和50年度に作成した金属工学シソーラスの文献検索効率をみるため約1000件の論文抄録にインデクシングを行なったものについて52年度はコンピュータを用いて検索実験を行ないました。

日本科学技術情報センター(JICST)を中心としてこれと連結する鉄鋼専門センターとして鉄鋼技術情報センターを設立する件につきましては、52年度に欧米に調査団を派遣して先進各国の技術情報組織を調査すると共に、鉄鋼技術情報準備委員会において検討を進めました。当初独立法人とすることを計画しましたが、厳しい経済情勢から極力経費の節約を図るため協会内の一部局とすることに改め、事務室ならびに要員規模を縮小、一方情報関係以外の一般会計予算を前年度比削減するなどの措置により漸く設立の見通しをえたものであります。事業内容は当初計画と余り変更しておりませんので会員各位に十分お役に立ちうるものと確信いたします。53年度における唯一の新規事業として4年から発足する鉄鋼技術情報センターの設立をご承認下さるようお願い申し上げます。

教育活動につきましては、52年度に3年目を迎える鉄鋼工学講座、52年度中の7回開催を加えて通算50回に及ぶ西山記念技術講座とも協会事業の重要な柱として定着しつつあります。

国際交流につきましては、52年度は、3月に日本・チェコスロバキヤ・シンポジウム、5月に第6回日ソ製鋼物理化学シンポジウム、9月にASMとの共催で切削性シンポジウムが何れも東京経団連会館で開催されそれぞれ多大の成果を収めました。また東南アジア鉄鋼協会に対しまして4月の東京大会への全面的支援、9月タ

イ国におけるシンポジウムに参加論文の提出など積極的な協力を行なっております。

53年度は4月のシカゴにおける国際鉄鋼会議(IISC)および同月ドイツで開催の第4回日独セミナーともわが国からかつて例のない程多数の参加者が予定されております。

終りにわが国鉄鋼業は次第に厳しさを増す国際環境の中にあつて打開の道を模索しつつあります。このような時に当り鉄鋼科学技術の役割はますます大きく鉄鋼協会の果たすべき使命も一層重大であります。会員諸賢の一層のご指導ご協力をお願い申し上げます。

引続き青山理事より昭和52年度収支決算ならびに53年度収支予算について報告がなされた。

(決算)

「決算の結果、収入は5億6,633万1,096円でありまして、収入予算に対し3,010万2,965円の増収となりました。これは一般経済界の不況にもかかわらず会員各位のご支援とご協力により、会費収入において約120万円の増収のほか、会誌・刊行物収入あるいは鉄鋼標準試料等の大幅な増収をみたことによるものであります。この点会計担当として皆様に厚くお礼申し上げます。

一方、支出の部におきましての決算の結果は、5億2,886万1,005円でありまして、支出予算に対し、736万7,126円の節減ができました。これは極力諸経費の節約に努めました結果でございまして、当期剰余金3,747万0,091円をもつて昭和52年度を終了することができました。

剰余金の処分については、その全額即ち3,747万0,091円を次年度へ繰越いたし昭和52年度財政を充実いたしたくここに提案いたします。

なお、決算の結果、昭和52年度末現在の一般会計保有の財産は、資産2億7,766万6,370円負債1億2,465万1,107円、差引純財産1億5,301万5,263円でございます。

別途資金会計は表彰ならびに事業資金、渡辺義介記念資金ほか11の会計を有しており、それぞれの目的に応じ、特別資金運営委員会、理事会の議を経て支出し、または蓄積されておまして、その収支および期末保有の財産は別記に示す通りでございます。

補助金事業等会計はの特別会計を有し、政府の補助金、委託金あるいは他団体の分担金等により運営しております。内容は別記資料の通りでございます。

(予算)

一般会計の収入の部では、前記繰越金を含め総額5億9,731万4,091円を計上いたしました。本年度も引続き経済界は未曾有の不況にはありますが、鉄鋼標準試料、広告収入、会誌刊行物等は、高い努力目標を掲げましたほか、やむを得ない理由により維持会費につき約10%の値上げをお願いすることといたします。この理由につきましては支出予算で申し上げます。支出予算につきましては、一般諸物価の上昇、国鉄運賃の値上げ、社会保険料の改訂等支出増加要因の多い中で、これらによる支出増を極力最小限に押えとともに継続事業および継続調査研究の内容充実に重点をおきました。また、予算編成にあたり特にご説明すべきことは、鉄鋼技術情報センターの新設であります。同センターは金属全般にわたる

技術情報を網羅するために当初独立した公益法人として発足する予定でありましたが、折からの不況等諸般の事情から当協会内の一事業とすることに変更しました。このため当初の規模を縮小するほか、当協会一般事業費を大幅に削減し、さらに事業収入増加分の大部分は当センター事業費に振向ける等により、当協会の事業としての位置付けをいたしました。

この結果、予備費を含め、前年度より約 11.4% 増の 5 億 9,731 万 4,091 円を計上いたしました。幸にして前期繰越金が当初の予想を上回ってまいりましたので、予備費を 1,335 万 5,091 円とし、諸物価値上げ等のほか不測の出費にも十分備える体制をとることが出来ました。

別途資金会計の予算は例年通り特別資金運営委員会の議を経て事業計画をもとに編成いたしました。

補助金事業等の収支予算でございますが、いずれも継続事業でございます。詳細は別記の通りでございます。

との説明がなされた。事業・会計報告の後、館野監事より事業・会計はいずれも適正であるとの報告がなされ、満場一致をもつて議事第 1 号、第 2 号、が承認された。

続いて、先に行なわれた理事、監事、評議員の選挙の開票結果がまとまり、理事 15 名、監事 1 名、評議員 128 名の各候補者全員が当選した旨、選挙管理委員より報告があつた。ここで総会は休憩に入り、別室で臨時理事会が開かれ会長、副会長、常務理事の互選が行なわれた。総会が再開され議長より互選の結果、新会長に荒木

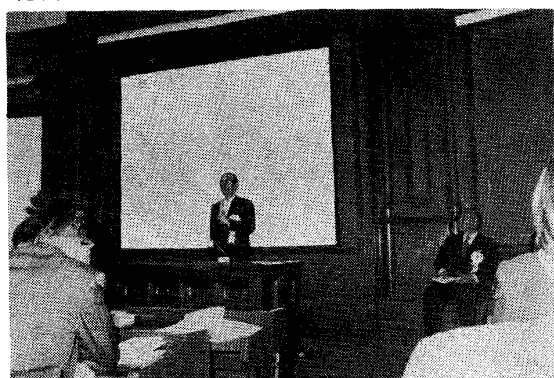


写真 1 荒木透新会長挨拶

透理事、副会長に松下幸雄理事、常任理事に吉田道一理事が当選された旨報告があり、第 63 回通常総会を終了した。

名誉会員推挙式 総会に引続き名誉会員推挙式が行なわれた。(推挙理由口絵参照)

表彰式 続いて表彰式が行なわれ下記の通り各賞が授与された。(表彰理由参照)

渡辺義介賞	武田 喜三		
西山賞	池島 俊雄		
服部賞	小南 曠	八木 靖浩	
香村賞	鈴木 驥一	戸田 健三	
渡辺三郎賞	川口 三郎	鈴木 禎一	
俵論文賞	槌谷 暢男	田口 整司	高田 至康
	岡部 俠児	鈴木 是明	宮本 剛汎
	川上 正博	永田 和宏	山村 稔
	坂田 直起	宮下 芳雄	後藤 和弘
	門 智	山崎 桓友	山中 幹雄
	吉田耕太郎	矢部 克彦	小林 尚

荒木 健治	福中 司郎	内田 国木
渡辺義介記念賞		
太田 豊彦	片田 中	田代 晃一
武市彦四郎	田中 俊章	西脇 実
羽島 幸男	浜地 和夫	林 泰生
堀田 一雄	松岡 秀男	山崎 俊二
山本 勝司	山本 治男	吉永 博一
西山記念賞	遅沢浩一郎	小畑 英一
菊池 実	桑名 武	越賀 房夫
徳田 昌則	永井 親久	中川吉左衛門
中島 宏興	西岡 邦夫	橋本 昌三
細井 祐三	松岡 孝	山岸 秀久

特別講演会 表彰式に続いて次の重り特別講演が開催された。

1. 「鉄鋼業と機械工業の関連」

ドイツ鉄鋼協会会長 Dr. Klotzback

2. 「製鋼技術の進歩発展と特殊鋼について」

渡辺義介賞受賞

大同特殊鋼(株)取締役社長 武田喜三君

3. 「最近の油井管およびラインパイプにおける冶金学的問題」

西山賞受賞

住友金属工業(株)取締役副社長 池島俊雄君

第 95 回 講 演 大 会

昭和 53 年度第 95 回講演大会は 4 月 4 日、5 日、6 日の 3 日間東京都文京区本郷 7-3-1 東京大学工学部で開催された。この大会では講演、討論、ポスターセッション、懇親会、ジュニアパーティーが開催された。

講演会・討論会 4 月 4 日、5 日、6 日の 3 日間 424 件の講演が 11 会場に分かれて行なわれた。専門分野別講演件数は次の通りである。製鉄 87 件、製鋼 93 件、加工 77 件、性質 167 件であつた。

また討論会は次の 5 テーマ 24 件の講演が行なわれた。

1. コークスの熱間性状 座長 館 充
松 岡 宏
2. 溶銑の予備処理 座長 川 合 保 治
神原 健二郎
3. 準安定オーステナイト鋼における TRIP 現象に関連した諸問題 座長 田 村 今 男
4. 鋼材溶接熱影響部 (NAZ) の材質劣化の諸問題 座長 金 沢 正 午



写真 2 ポスターセッション会場風景

5. 圧延材の品質計測 座長 吉 谷 豊
 ポスターセッション 今年より春季講演大会にポスターセッションを開催することとなり、その第1回が開催された。工学部5号館に9ブースがもうけられ、2日間に亘り27件の講演が行なわれた。

懇親会 4月5日午後6時より神田学士会館で開催された。松下新副会長司会のもと両会新旧会長の挨拶に始まり、各地から参集した会員諸氏の間で歓談がくりひろ

げられた。

ジュニアパーティー 4月4日午後5時30分より東京大学山上会議所で開催された。参加者は150名にのぼり、参加者中より日本鋼管技研北川融氏、東工大川上正博氏に司会を依頼し、郡司講演大会分科会主査の乾杯の音頭で始められた。若手技術者、研究者を中心に自由に懇談がなされ、親交を深めた。

書 評

長谷川熊彦著：わが国古代製鉄と日本刀

本書は、われわれ製鉄に従事する研究者、技術者の大先輩長谷川熊彦先生の労作である。まず驚くのは、何といつても94才という高令の方がこれだけの力作をまとめられた事実である。

その内容は、的場幸雄先生の“序”に始まり“著者のことば”があつて、本文は表題の“わが国古代製鉄”と“日本刀”がⅠ、Ⅱ編を構成している。読者は本文に入る前に、まず巻末の総括を読まれたら如何かと思う。それには、著者の技術者としてまた教育者としての70年が凝縮されている。さらに、著者の基本的な姿勢すなわち日本民族への愛、祖先への感謝、若い世代への期待感がにじみ出ている。

“著者のことば”にいわく、“…自由に読書し、自由に運動する便を得たので考古学を学び、砂鉄を学び、古代製鉄を学ぶ機会に恵まれた。…”と。本書は文献の単なる集録でなく、著者が自ら全国を踏査して消化しつくされた知識の集約である。

(松下 幸雄)

発行年月 昭和52年12月 発行所 技術書院 定価 2500 円

昭和 51 年度「鉄鋼生産設備能力算定方式」(分冊 6 編) の 有償頒布について

1. 編集内容

各編とも前版に準じて大体次のように編集されております。

- 1) 算定式適用に際しての基本的条件
- 2) 算定式使用要領
- 3) 能力算定式および諸係数
- 4) 算定式の解説
- 5) 能力算定式に必要な操業諸調査票の様式
- 6) 計算例
- 7) 簡略式
- 8) あとがき

2. 頒布価格

- (1) 製鉄編 (34頁)250 円
 - ①高炉鉄、②フェロアロイ各生産設備
- (2) 製鋼編 (114頁)650 円
 - ①転炉、②平炉、③電気炉、④連続铸造、各生産設備
- (3) 鋼板編 (358頁)1,250 円
 - ①分塊、②厚板、③ホットストリップ、④コールドストリップ、各生産設備

3. 申込方法

書名、部数、送付先を明記のうえ代金を添え現金書留にてお申込み下さい。
 なお、全6編の場合 4,800 円となります。

4. 申込先

〒100 東京都千代田区大手町 1-9-4 経団連会館3階
 日本鉄鋼協会 技術部 吉野谷 電話 (03) 279-6021

- (4) 条鋼編 (188頁)850円
 - ①大形、②中小形、③線材、各生産設備
- (5) 鋼管編 (295頁)1,150 円
 - ①継目無鋼管生産設備
 - (イ) マンネスマンプラグミル法
 - (ロ) “ ” マンドレルミル法
 - (ハ) “ ” ピルガーミル法
 - (ニ) “ ” アッセルミル法
 - (ホ) ユジーンセルジュルネミル法
 - (ヘ) エルハルトプツシュペンチミル法
 - ②溶接鋼管生産設備
 - (イ) 電縫鋼管
 - (ロ) 鍛接鋼管
 - (ハ) UOE CONTINUOUS FORMING 溶接鋼管
 - (ニ) スパイラル溶接鋼管
- (6) 連続加熱炉編 (121頁)650 円
 厚板用、熱延用、大形用、中小形用、線材用、継目無管用、分塊用、鍛接鋼管用